

## 第5回 アテナイの戦争と平和 – パルテノン神殿の栄光

アリストパネスの喜劇「女の平和」が上演された前411年は、アテナイ市民にとって最も暗澹たる時期だった。若くて美しい婦人リューストラテー（「軍を解く女」という意味の名）が、ギリシア中の婦人方（ポリス代表）をアクロポリスに集める。軍資金金庫を占拠し性的ボイコットの手段で男たちの戦争を止めさせるという奇想天外な筋書きだ。リューストラテーは占拠を阻む警備役人に対して、痛切な言葉を吐く。

「どういたしまして、この不浄者め、あたしたちは戦争の二倍以上の被害者ですよ。第一に子供を生んで、これを兵士として戦争へ送り出した」（高津春繁訳）。

猥雑な笑いで見事な大団円合唱の背後にひそむ喜劇作家の平和への願い。これを読むとき、戦争に明け暮れた時代の空気を感じ取ることができる。

古代のギリシア世界では、大地と海は神々に捧げられており、アテナイの守護神は「アテナ女神」だった。前5世紀、ペルシア戦争に勝利したギリシア世界の中心となった都市（ポリス）はアテナイだ。時の指導者キモンは建築家カリクラテスを起用して、ペルシアに傷つけられたアテナ女神の神殿「パルテノン」の再興を始めた。しかしキモンがペルシア軍掃討戦にかかりつきりになって死去した後に、新しい指導者に登ったのは政敵のペリクレスだった。ペリクレスは民衆派の代表として、彫刻家フェイディアスと建築家イクティノスを起用し、文字通り市民総動員の戦災復興工事を基礎の再構築からスタートさせた。その手法は新しい産業と市民社会を創造するにふさわしい大がかりなものだった。アテナイにはデロス同盟の供託資金とラウレイオン鉱山から産出する銀が豊富にあったのだ。



アテナイのアクロポリスとパルテノン神殿（南西から1994年撮影）

もともとギリシア神殿は切妻屋根と妻入りの単純な基本構造をもち、木造から発達した建築様式だといわれる。多くのドーリア式神殿建築の中であって、大理石造のパルテノン神殿は構造ディテールがユニークだ。セメント類（接着剤）をいっさい使わず、木製のだぼ一本で固定された十一個の円柱体から成る柱は、継ぎ目がわからないほど精度よく作られている。パルテノンには厳密な意味での直線が一本もない。柱は内面が垂直だが、外面は少し内側に傾いている。しかも四隅の柱は、他より太くできている。また床や桁材はわずかに中高の曲線である。これらの傾きや曲がりや人力施工ゆえの不整ではない。規則性からわずかに外れたところに、建築へ生命を吹き込んでいるのだと美術史家が指摘している。パルテノンは大地になじむ自然な曲線と、天空の一点を目指して飛翔する運動性、そして地震力に対抗する安定性を兼ね備えたバランスよい構造形態を実現しているのである。

前430年に始まったペロポネソス戦争は東地中海におけるアテナイとスパルタの覇権争いであった。事態は一進一退を繰り返し、413年にはアテナイのシチリア遠征失敗もあって、同盟国の離脱が続く事態になった。やがて婦人たちの願いが通じたのか、404年にスパルタ勝利のかたちで27年間にわたる戦争がようやく終結した。同時代の歴史家トゥキュディデスは冷徹な目で戦いの記録「戦史」を書き綴った。なかでも前426年に起こった地震と津波に関する記述（第3巻89節）は、津波の原因を地震に起因すると初めて科学的に言及したものとして注目される。

ペロポネソス戦争関連略年表（参考図書にもとづき作成）

年代 (BC)	アテナイを中心としたギリシア世界のできごと	備考
480	第2次ペルシア戦争でペルシア人がアテナイに侵入	アクロポリスの破壊・荒廃
	サラミスの海戦でギリシア軍の勝利	指導者テミストクレス
477	アテナイ主導でデロス同盟結成（スパルタ主導のペロポネソス同盟はアテナイから離脱）	ラウレイオン銀山開発が進み、アテナイの経済的覇権確立
465頃	貴族派・キモンの主導によりアクロポリス再興始まる	建築家カリクラテス
464	スパルタ大地震（約2万人死亡）、ヘイロータイの反乱	キモンの協力支援をスパルタ拒否
450	キモンの死去に伴い民衆派・ペリクレスが指導者に	
447	ペリクレスの主導によりアクロポリス再興のやり直し	建築家イクティノス
438	パルテノン神殿完成	アクロポリスの全建造物完成は415年頃
430	ペロポネソス戦争（デロス同盟vsペロポネソス同盟）勃発	ペリクレスの葬送演説
429	アテナイ市内に疫病蔓延（ペストまたはチフス）	ペリクレスの疫病死
426	エウボイア島付近を震源とするアッティカ地方地震・津波（トゥキュディデス「戦史」の科学的記述）	シチリア島・エトナ山の大噴火（425年）
415	アテナイ軍のシチリア島遠征→遠征失敗（413年）→デロス同盟諸国のアテナイ離脱	
411	アテナイ民会が解体、400人体制から5000人体制へ	アリストパネス「女の平和」
404	アテナイの降伏（ペロポネソス戦争が終結）	アテナイのスパルタ支配と政治的混乱

古典とは「模範としてならうべき第一級の文化」をいう。アテナイの栄光を背負ったパルテノンはギリシア・アッティカ地方を襲った地震（前426年）や6世紀以降のキリスト教支配、15世紀以降のオスマントルク支配、ベネチア軍の爆破（17世紀）、西欧列強による装飾彫刻の略奪（19世紀）に遭っても、端正なプロポーションを誇る石造の構造体がアクロポリスの丘に立ち続けている。2500年のときを経て、東地中海地域をとりまく国際紛争の渦中にも毅然と姿を見せるパルテノンこそ、真の古典建築というべきだろう。そしてまた、アクロポリスを舞台とした喜劇「女の平和」は、涙のにじむ和平論、優れた古典喜劇がもつ悲しさを現代に伝えているのである。

（参考図書）

- アリストパネス（高津春繁訳）「女の平和」（岩波文庫）1951年
- Thucydides（R.Warner訳）“History of the Peloponnesian War”（Penguin Classics）1972年
- R.カーペンター（松島道也訳）「パルテノンの建築家たち」（鹿島出版会）1977年
- アリストテレス（村川堅太郎訳）「アテナイ人の国制」（岩波文庫）1980年